

2 学期始業式校長講話要旨

○2 学期が始まりました

今年の夏は、各地で40度を超えるなど猛暑の日々が続きました。8月の末とはいえ、まだまだ、暑い日が続きますので、今日もオンラインでの始業式になりました。インターハイなど夏の大会での各部の活躍も顕著なものがありました。

○8 月について考えること

「八月や 六日、九日、十五日」という俳句？川柳？があります。

これは昭和20（1945）年8月のことを詠んだものです。皆さん知っているとおり、今から80年前、8月6日は広島に原爆が落とされ、次いで9日は長崎に原爆が落とされ、15日に日本は連合国から出されたポツダム宣言を受諾して終戦の日を迎えました。

8月は鎮魂、様々な人々の霊を慰めるだけでなく、平和への誓いを改めて確認する月でもあります。とくに今年は戦後80年の節目として様々なイベントや戦後史を総括するテレビ番組等がありました。今から30年前、戦後50年の節目の村山首相の談話では、

敗戦の日から50周年を迎えた今日、我が国は深い反省に立ち、独善的なナショナリズムを排し、責任ある国際社会の一員として国際協調を促進し、それを通じて、平和の理念と民主主義を押し広めていかねばなりません。同時に我が国は唯一の被爆国としての体験を踏まえて、核兵器の究極の廃絶をめざし、核不拡散体制の強化など国際的な軍縮を積極的に推進していくことが肝要であります。

20年前、60年目の小泉首相の談話では、

我が国の戦後の歴史は、まさに戦争への反省を行動で示した平和の60年であります。我が国にあっては戦後生まれの世代が人口の7割を超えています。日本国民はひとしく自らの体験や平和を志向する教育を通じて国際平和を心から希求しています。

歴代の首相談話を踏まえて、10年前の70年目の安倍首相談話では、

こうした歴代内閣の立場は今後もゆるぎないものであります。…中略…私たち日本人は、世代を超えて過去の歴史に真正面から向き合わなければなりません。過去を受け継ぎ、未来へと引き渡す責任があります。

さらに、

我が国は、いかなる紛争も法の支配を尊重し、力の行使ではなく、平和的・外交的に解決すべきである。この原則をこれからも堅く守り、世界の国々にも働きかけてまいります。唯一の被爆国として、核兵器の不拡散と究極の廃絶を目指し、国際社会でその責任を果たしてまいります。

という一節があります。

そして、今年、８０年を迎えた首相談話は、残念ながら出されなかったのですが、８月１５日の天皇陛下の全国戦没者追悼式でのお言葉は、

…終戦以来８０年、人々のたゆみない努力により、今日の我が国の平和と繁栄が築き上げられましたが、多くの苦難に満ちた国民の歩みを思うとき、誠に感慨深いものがあります。戦中・戦後の苦難を今後とも語り継ぎ、私たち皆で心を合わせ、将来にわたって平和と人々の幸せを希求し続けて行くことを心から願います。…

私たちが特にこの８月の記憶・歴史から学ばなければいけないこととは、間違いを犯した事実・歴史を謙虚に学び、そういった間違いを二度と起こさないこと、平和で明るい未来を展望することが必要です。そして、これから日本の社会が「新しい戦前」にならないことが最も大切なことです。今年８月６日の広島平和記念式典でのこども代表「平和への誓い」の中に、

…平和について関心をもつこと。多様性を認め、相手のことを理解しようとする。一人一人が相手の考えに寄り添い、思いやりの心で話し合うことができれば、傷つき、悲しい思いをする人がいなくなるはずです。周りの人たちのために、ほんの少し行動することが、いずれ世界の平和につながるのではないのでしょうか。…

広島の小学校６年生の２人の言葉がこれからの社会を支えていく人たちの心構えとしていきたいものです。

○希望について考える

歴史社会学者の小熊英二の「生きて帰ってきた男 ある日本兵の戦争と戦後」という本が１０年ほど前に出版されました。これは著者の小熊英二さんの、そのとき９０歳になるお父さんの人生の聞き取りの記録ですが、このお父さんは、昭和２０年に戦争が終わってから、シベリアに抑留され、日本に帰ってきてからは結核で療養所に入ってしまう。人生のうちでもっとも活動的な輝ける２０代の十年間がシベリアと結核療養所で過ごさざるを得なかった人です。この本の末尾で息子の英二さんがお父さんに聞きます。

未来が全く見えないとき、人間にとって何が一番大切だと思ったかという問いに対して、お父さんはこう答えます。

「希望だ。それがあれば、人間は生きていける」

この言葉でこの本は終わります。

そう、希望があれば、どんな状況でも生きていけると思います。皆さんの希望は何でしょうか。ぜひ自分の希望、未来を見つけてほしいと思います。